S12 Mission of Asian Psychology (アジアの心理学の使命)

企 画 者	名古屋大学	齋藤洋典
司 会 者	名古屋大学	齋藤洋典
話題提供者	Chinese University of Hong Kong	Hsuan Chih Chen#
話題提供者	Seoul National University	Jung-Oh Kim#
話題提供者	China Medical University	Jong-Tsun Huang#
話題提供者	Chinese Academy of Sciences	Lin Chen#

概 要

本シンポジウムの企画の主旨は、「アジアの心理学の使命とは何か」を問うことにあります。アジアの心理学者は、世界の心理学の枠組の拡張に貢献することが可能であるし、貢献することが期待されており、私たちはそうした貢献の方途について話し合う時期にさしかかっています。

アジア諸国の心理学者は、かつて、そして現在も、西洋諸国に多くを学び、先達が学んだ心理学を継承して発展させることに努め、そして、各方面で、それなりの成果を上げて来ております。

ところで、先達が学んだ心理学が何を目指した学問であったのかを再認識するために、どのような心理学者がいたのか、彼らが何を対象に研究を進めてきたのかを振り返ると、心理学の研究対象が、時代を経て、変化してきていることに思い至ります。

G.A. Miller(1992)は、次のように述べています。「心理学を最初に定義したのは十九世紀、ドイツのヴントでした。当時、心理学は直接経験の科学と定義されていました。ヴントの定義は精神生活の科学というジェームズの定義とほとんど同じ意味を持っていました。つまり直接経験とは正常な、成人の、教養ある西ヨーロッパ人、それも通常は男性の意識や内的経験のことだったのです。しかし科学が発展するにつれて次第にこのような制限は不要になってきました。」

現在の心理学は、このような経緯を経て、成人以外の、西ヨーロッパ人以外の、男性以外の、意識や内的経験以外をも研究対象としています。しかし、ミラーは、言葉を補って次のようにも述べています。「視点が違い、していることが違い、しばしば利用している方法や技術まで違っているために、心理学者同士でお互いの研究について全く話が通じないこともあるほどですが、それでも、精神生活の本質を理解しようという共通の関心によって心理学者たちは結びついているのです。」

さて、心理学者たちは、本当に結びついているのでしょうか。昨今のグローバリゼーションの観点に立てば、改めて「アジアの心理学」を問う必要はないことになります(L.Chen)。しかし逆に、世界規模で進行する一元的価値の蔓延が、真実であるなら、それが真実として、心理学がその誕生当初から直面していた、精神活動の「普遍性と個別性」という問題が、それぞれの文化や社会がもつ問題に照らして、クローズアップされてもいいのではないのでしょうか。

西洋の心理学者が、心理学や心理学者をどう捉えて来たのかということに加えて、私たちの地域で暮らしている社会の人々が、私たちに何を期待しているのかということについて、考えてみるのも、必要なことではないのでしょうか。例えば、アルファベット表記を中心に進められてきた言語処理の研究に対して、アジアの言語を材料とした研究はいかなる提言をなし得るのでしょうか(H-C.Chen)。また、災害に見舞われた人々に対して、心理学者は何をなし得るのか。また、何をなす事が期待されているのでしょうか(Huang)。さらに、西洋が数百年かけて築いてきた教育・研究組織を、アジアの国々は、急速な経済発展の中で短期間に作り上げて来ましたが、その弊害とほころびはないのでしょうか(Kim)。

本シンポジウムで取りあげるこれらの問いは、特定の研究領野を越えて、ゆっくりと、しかし確実に私たちの精神生活の本質に影響を与えつつある問題のごく一部です。複数の研究分野において、独自の問題点を関連するアジアの研究者たちと発掘し、世界に向けて発信する機会の一端となることを祈念して、本シンポジウムを企画する次第です。異なる研究分野の方々のご参加をお待ちいたしております。